

## 貧者のジエンダー

### ——近世イタリアの救貧主義と貧者像の変容

新保淳乃

はじめに

貧困は重大な社会問題のひとつであり、貧者のイメージとそれに対するまなざしはさまざまな矛盾を孕んでいる。西欧社会は貧者の宗教とも呼ばれるキリスト教を基盤としており、個人の慈善活動や公的な社会福祉政策の歴史も長い。しかし近世に至るまで、富める者と貧しき者に二分された社会構造は「神が定めた摂理」と考えられていた。貧富の差を前提とする枠組みの中で、貧者は慈善の対象として、自発的に選択される清貧のモデルとして、あるいは社会から排除すべき悪としてさまざまに規定され、一様ではない視覚イメージによって語られてきた。こうした貧者像を近世イタリアの史的文脈とジエンダー構造に依拠した表象として考察し、新たなまなざしの制度を作り出す

場として捉え直すことはできないだろうか。貧民像の変容をジエンダーに着目して再読することによって「貧者を視る」まなざしとその変化を明らかにしたい。

歴史研究の豊富さに比べて、近世の貧民像に関する視覚表象研究はけっして多くはない。近年、トム・ニコルズが十六世紀におけるアルプス南北間の貧者像を比較検討し、両者の差異を指摘した<sup>1)</sup>。彼は教会装飾など公式性の強い芸術作品と印刷本や版画など不特定多数に向けた複製芸術とで表現に差異があることから説き起こし、アルプス以北とイタリアの絵画伝統上の差異と展開、プロテスタント地域とカトリック地域の差異と連続性を追っている。十六世紀には北方で創出された反救貧主義的貧民像と、イタリアにおける貧民像の古典主義的理想化が影響し合いながら共存していた。ニコルズが編纂した論集『近世

ヨーロッパにおける他者と除け者<sup>2</sup>では、イタリア地域における貧者表象が、アルプス以北との社会構造の違い、表象文化伝統の違いに影響を受けつつ独自の展開をとげたことが論じられている<sup>2</sup>。

## 一 貧者をめぐるまなざし——救貧思想の変化

十六世紀から十七世紀にかけてヨーロッパの救貧思想は大きく変化した。これに伴い貧者像もまた変容を遂げた。

### (一) 伝統的貧者像

キリスト教社会において「キリストの貧者」とみなされた社会的弱者は、伝統的に施す側の魂を救う物質的な慈善の対象として視覚化されてきた。イエスの山上の垂訓に出てくる「憐み深い人は幸いである。その人たちは憐みを受ける」(マタイ五章七節)の言葉に基づいて、七つの善行(マタイ二五章三五～四〇節)に努めた信者は最後の審判で救済を得られるとされた<sup>3</sup>。十五世紀までの「キリストの貧者」のイメージは、托鉢修道士による選ばれた「貧しさ(清貧)」と物質的に困窮した貧民に代表される<sup>4</sup>。例えばマザッチョの《足萎えを癒すベテロ》(二四二六～二七、フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・カルミニネ聖堂ブランカッチ礼拝堂)【図1】のように、キリス

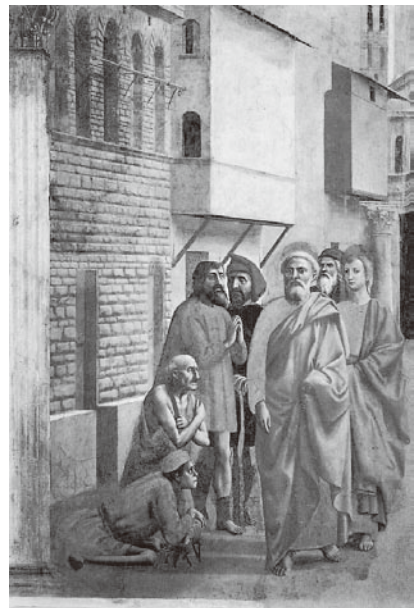


図1

トや使徒が病人や身障者(足萎え)を治癒する場面、あるいは《貧者にマントを分ける聖マルティヌス》に代表される物質的施しを主題とする図像には、義足や杖で不自由な身体を支える男性身障者や働くことのできない老人、衣服の破れた貧しい巡礼者が描かれる。彼らは余剰の富を善行に向けさせ、施し手に浄財と救済の機会を与える「キリストの貧者」である。マザッチョのフレスコ壁画に見られるように、伝統的な貧民イメージは男性像で表されることがほとんどである。また、施しの受け手たる貧者の描写は四肢の障害や老齢など外面的に判別しやすいものに絞られている。善行の施し手に焦点が当てられるため、受益者が救済に値するかは問われない。

## (二) 救貧思想の変化

伝統的な貧者像が施しの受け手として正当化されたイメージだったのに対して、初期資本主義経済を基盤に都市文化が発展した十五世紀半ばから、都市の公的空間を占拠し、他者の施しによって生きる物乞いに非難が集まるようになった。一四四三年から五〇年にかけて人文主義者アルベルティが著した『モムス』には、社会の周縁的存在を糾弾する新たなまなざしが凝縮されている<sup>5</sup>。アルベルティは、都市に溢れる「乞食は他者の汗と労働の上に胡坐をかく」寄生者であり、「自分の都合で閑暇を悪用する」と激しく非難した<sup>6</sup>。

世俗的救貧政策の先駆となった北イタリアのヴェネツィアでは、一四九〇年代に梅毒が突如流行して社会不安とパニックを引き起こした<sup>7</sup>。一五〇六年にヴェネツィア共和国政府は、「疫病に侵された地域から来た者かどうか判別できるよう」顔を隠した物乞い行為を違法とした<sup>8</sup>。この政策は貧民層を疫病の運び手とみなして彼らに恐怖心の矛先を向けると同時に、身体疾患の有無によって真の貧者と偽の貧者を見分けようとする新たな救貧思想を反映していた。『モムス』が公刊された一五二〇年には、ヴェネツィア共和国議會で「偽乞食」にガレー船送るか市外追放の罰則を課した最初の救貧法が發布され、以後、公的慈善を監督・実施する高官(Procuratore di San Marco)のものと救済に値する「真の貧者」と排除すべき「怠惰な貧者」の弁別が公的福祉の現場に導入された<sup>9</sup>。

一五二六年、商業経済の盛んなフランドルのブルージュ市のために、スペイン生まれの知識人フアン・ルイス・ビベス(一四九三―一五四〇)が『救貧論(De subventione pauperum)』を著した<sup>10</sup>。第一書では善行のあり方が論じられる。真の善行にとって重要なのは美德の実践による他者の救済であり、その次に都市・国家の監督による教育、治療等の物質的善行、金銭の施しが続く。人が善行から離れる理由を論じた章では、物乞いの側の忘恩と策略という「偽乞食、偽貧民」批判が展開される。ビベスはパウロ書簡を引いて「傲慢な貧者、金持ちの乞食、馬鹿で愚かな老人」を糾弾し、働ける者は怠惰になつてはならないと説いた<sup>11</sup>。第二書では都市行政の義務としての救貧論が具体的に説かれている。ビベスの主張は労働の価値の重視と怠惰の追放である。彼は述べる——都市は秩序ある家庭と同じく働かない怠惰な者を置くわけにはいかない、盲人・老人・病人も彼らにできる仕事をすべし。また、修道会や慈善家が担っていた施療院の運営にも行政がメスを入れるよう促した——施療院に寄生する者を追放し厳格な基準のもと財政の適正さを調査する、施療院に病んだ物乞いの場所がなければ専用収容施設を建てて医師、薬剤師、男女看護人を用意する、家において稼げる額が生活費に足りない場合は都市が補助金を出すべきである<sup>12</sup>。

都市における物乞い行為の全面禁止と、体の動く貧者に労働を課すことを説くビベスの主張は、カトリック地域の公的貧民

対策にも決定的な影響を与えた。一五四五年にはヴェネツィアでイタリア語訳が出版されている。

このように無差別的救貧から選択的救貧へと救貧思想が変化したのを受けて、十六世紀から多くの都市で、貧困問題の場が宗教的な善行の次元から世俗行政による社会福祉へと拡大した。その過程で、救済すべき貧者と、排除（市外追放）もしくは隔離（強制収容）すべき貧者との線引きが行われるようになった。歴史家ゲレメクは貧民に対するこの異なる態度を「慈愛と絞首台」という言葉で言い表している<sup>13</sup>。物乞いや非定住民を怠惰の悪徳と結びつける思想は、労働、生産・商業活動に支えられた都市社会と相いれない「他者」としての貧民イメージを生み出した。

## 二 貧者像の変容

近世ヨーロッパの都市社会において顕著になった貧民観および救貧政策の変化は、貧者の視覚表象にどのような影響を及ぼし、どのような貧者イメージを生み出したのだろうか。

前章で概観したように、十五世紀までの典型的な貧者像は男性の身障者と巡礼者である。これに対して、十六世紀から十七世紀にかけて新たに形成された貧者像には身体疾患を伴わない男性と女性が多く含まれる。本章では、この変化に着目して近

世イタリアの祭壇画を中心に貧者像をめぐる新たなまなざしを検証する。近世の貧民表象を考察するにあたり、先行研究に欠落していたジェンダー論的視座を組み込む必要性を強く主張したい。

### （一）選択的救貧論とロレンツォ・ロット《聖アントニノの施し》

十六世紀以降、社会的に慈善の手を差し伸べるべき貧者、つまり「施しに値する」貧者が神学解釈と福祉政策の双方で議論された。プロテスタント地域に比べてカトリック地域のイタリア半島では無差別の救貧論が根強いが、ヴェネツィアを嚆矢に世俗権が貧民政策に乗り出すとともに、受益者の資格を問わない無差別的救貧主義が問い直された。代わりに唱えられたのは、貧者の真偽を見分けることによって、施しの行為を真に有効なものにするべきという主張だった。そこで登場するのが、おもに没落貴族をさす「恥じ入る貧者 (poveri vergognosi)」、寡婦、更生可能な子どもと悔悛娼婦であった。ロレンツォ・ロットがヴェネツィアの下メニコ会修道院聖堂のために描いた《聖アントニノの施し》（一五四〇〜四二、ヴェネツィア、サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂）【図2】を例に、近世の新たな貧者イメージを確認してみたい。

水平に三分割された画面の前景には【図3】、左側に腕を伸ばして施しを求める人々、右側に請願を渡そうとする人々が描かれている。手すりによって群衆と分かれた中景では、硬貨の



図 2

袋を手にして施しの相手と金額を吟味する助祭と、ベールを被った女性から請願を受け取り他の請願を拒む高位聖職者がいる。彼らは教会権に統制されたあるべき善行の実践を体現している。上景で天使の声を聞きながら請願を審査する聖人が、十五世紀のドメニコ会士でフィレンツェ大司教聖アントニーノ（二四〇五〜五九）である。

アイケマの優れた画像分析によると<sup>14</sup>、祭壇画制作の背景にはドメニコ会内部の対立があった。一五二〇年よりヴェネツィアで法制化された国家的救貧政策と同じく、受益者を選別するロットの描写は、聖アントニーノの救貧思想に則っている。アントニーノは、ビ



図 3

ベスに半世紀先立って「偽の乞食を見分け、真に施しを必要としている者を対象とせよ」と説いた。ロットの施主である修道院長はこの改革的慈善思想を画像化することで院内改革をアピールした、とアイ

ケマは解釈している。

興味深いことに、前景左で教会の施しを求めて手を掲げる男女は、助祭から施しを受取ることができない。彼らは継ぎ接ぎの衣服を着けているが、これといった身体疾患は見られず、伝統的な貧者像とは違う労働可能な貧民である。競って施しを求め、彼らと対照的なのが、白布で顔を隠し少女を連れた



女性と壁際でベールを被り俯いた女性である。おそらく彼女らこそ家柄から困窮を訴えにくい没落市民であり、アントニーノが「恥じ入る貧者 (poveri vergognosi)」と呼んだ、救済すべき真の貧者と解釈できよう。アントニーノの拠点だったフィレンツェでは、一四四二年には早くも「恥じ入る貧者」を救済するブオノミニ(善人)信徒会が結成された。ヴェネツィアでは一五三七年に同様の在俗信徒会が設立された<sup>15</sup>。したがって、ヴェネツィアではロットの祭壇画が描かれる数年前から、「恥じ入る貧者」が新たな「真の貧民」カテゴリーとして認知されていたと思われる。

選択的救貧思想に基づいた描写は、前景右側にも読み取れる。聖職者が請願の束を受取る相手は、黒や褐色のベールを被った一見して寡婦と分かる年配の女性たちと、若い女性と盲目の障害を持つと思われる少女のグループである。後者は救済対象リストに挙げられた、品行公正な貧困女兒に対応する可能性もある。ロットの描写は、施しに頼る貧困層にも救いの手を差し伸べるべき貧者か否かを問うべき、とする新たな救貧思想の直接的な表現と言えよう。

## (二) リーパ『イコノロジア』

近世に大きく変容した貧者概念は、寓意擬人像を事典化したリーパの『イコノロジア』(初版一五九三年)にどのようなまとめられたのだろうか<sup>16</sup>。

四種の《貧困》擬人像のうち、「物乞いをするジブシー風の女」と「黒ずんだ服を着た瘦せて恐ろしい形相の女」は物質的窮乏に力点が置かれており、流浪する貧者への他者視も窺える。偽乞食の悪徳とされた《怠惰》の擬人像は「髪を振り乱し安物で汚れた服の女、うつむいて両手で胸を隠し足を重ねて座る」とある。足を重ねたり衣服で手を隠す「怠惰な貧者／偽乞食」は、十六世紀北方の反救貧図像に頻出するモチーフだった<sup>17</sup>。では、貧困の要因であり状態でもある《飢え》はどうだろうか。リーパは「瘦せてみすばらしい女、右手に柳の枝、左手に軽石をもつ」とし、不毛と不妊が飢え・飢饉の主原因と解説した。みすばらしい身なりで非生産的な瘦せた女性像は、物質的窮乏と精神的な貧しさの双方と結びつけられた。

## 三 理想的貧民像の創出

### (一) ラファエロ以後

十六世紀前半から、フランドルとドイツのプロテスタント地域を中心に、身体をデフォルメされ戯画化された「怠惰な乞食」イメージが作り出された。否定的な貧者像は一点物の油彩画よりも広範に流通する版画媒体を通して流布し、特に托鉢修道会を「怠惰な乞食」と見なしてカトリック教会を非難する攻撃の一端を担った。これに対してイタリア絵画では、一五四〇



図 4

ヴェネツィア、考古

年代までに貧民の身体表現を理想化する流れが生まれた。ニコルズの研究にしたがってそのプロセスを概観する。

ラファエロはシステイーナ礼拝堂使徒行伝タベストリー連作の《足萎えの治癒》カルトーネ（一五一五〜一六年、ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館）【図4】において、身体障害を持つ物乞いに四肢の捻じれとデフォルメされた顔を与

えた。しかし、ラフ

アエロの追随者たち

は宗教画に物乞いや

貧者を多数登場さ

せ、古典彫像やラフ

アエロ、ミケランジ

エロなど盛期ルネサ

ンス芸術のモデルを

引用した美しい身体

を与えていった。中

でも一五二三年まで

ヴェネツィア大使グ

リマーニがローマ公

邸に陳列した古典

彫像《瀕死のガリ

ア人》（二〇〇年頃、

学博物館）は、傷ついて仰け反る古典主義的人体のモデルとして、ベルツツイの《マリアの神殿奉獻》（一五二三年、ローマ、サンタ・マリア・デッラニマ聖堂）の準備素描（一五二三年頃）、ジュリオ・ロマーノの《キリストと姦淫の女》（一五七五年以後の版画で伝わる）、ダニエーレ・ダ・ヴォルテッラの《マリアの神殿奉獻》（一五四八〜五三年、ローマ、トリニタ・デイ・モンティ聖堂）等で、半裸の物乞いの描写に引用された<sup>18</sup>。

ラファエロのカルトーネ図像はローマでこれを模写したパルミジャーニノやカラリオの版画を通して北イタリアに伝えられた。一五三〇年頃のバルミジャーニノの版画ではすでに、野卑な要素を取り去った「美しい」物乞いへと改変が行われ、それを参照したヴェネツィア画家の間でも古典主義的な美しい身体をもった物乞い・病人・貧民の表現が主流となった<sup>19</sup>。ティントレットは古典彫像と盛期ルネサンスを幅広く参照したが、モデルとする人体に内在する意味が引用先のテーマと適合するようデコールムへの配慮が見られる。例えば《キリストと姦淫の女》（一五四六頃〜四七年、ドレスデン絵画館）では、右端で横臥する病人⇨貧者に《ガリア人》とミケランジェロの《昼》が引用されているが、虐げられた者、瀕死の苦痛に苛まれる者の重く横臥するポーズは、近づく死と審判を待ち贖罪を願う罪人としての人間性を表す造形言語として選ばれている<sup>20</sup>。



図5

## (二) アンニーバレ・カラッチ 《聖ロクスの施し》

十六世紀イタリア絵画における肯定的な貧者イメージは、主要場面を説明する周縁的な位置から徐々に画面前景を占めるようになり、世紀後半に近づくに従って人数も増えていった。一五八〇年代よりプロト・バロックの潮流を起すポローニャ派のアンニーバレ・カラッチは、ポローニャのサン・プロスペロ聖堂祭壇画《聖ロクスの施し》（一五八八・九五年、ドレスデン絵画館）【図5】において、画面の前景と中景に貧民群像をピラミッド状に展開し、英雄的な身体を与えた。

十四世紀にモンペリエで生まれた聖ロクスは、聖地巡礼の途上でイタリア半島のベスト流行に遭遇してベスト患者の看病に尽力したが、自ら罹患してしまう。森に隠れて一人死を覚悟したが、天使の助けで無事回復を果たした。一四七八年に聖人伝が出版されると、十四世紀末から十五世紀にかけてベストに対する守護者として全ヨーロッパ規模で急速に信仰が高まった聖人である。代表的な反ベスト聖人の聖セバスティアヌスと組み合わされて描かれることが多い<sup>21</sup>。本作でカラッチが描いているのは、回心の末に清貧を選び一巡礼者として聖地を目指す決心をしたロクスが、私財をすべて貧者に分け与える場面である。ただし、本来の主題である聖人の施しは画面上景に後退している。宮殿のような建物の基壇上に若き聖ロクスが立ち、財布を開けて硬貨を配っている。彼の周りには半裸の子ども、幼児を抱いた女性や男性が群がり、施しを求めて小鉢や手を伸ばし





図 6

ている。画面右端から手押し車を押し現れる男性によって右から画面中景へと視線を導く構成と、若きロクススの円光から、鑑賞者は世俗的な富を捨てて貧者に施す聖人の善行という主題を読み取ることができる。まず目を引くのは前景を占める群像であろう【図6】。

左前景のターバンを巻いた男女と施しの硬貨を手にする子どもたちからなる貧者の一群は、一見したところ近世の怠惰な貧民イメージに類出する「ジブシーの一家」と類似している。地面に置かれた杖、水筒用の瓢箪は彼らが町から町へと放浪する社会的周縁者であることを暗示する。破れた上衣からむき出しになった裸の下肢と、地面に座った女性がもらった硬貨を落としている木鉢は、物乞いで生きる貧者の記号である。しかし、ニコルズが指摘したとおり、否定的意味を帯びたアルプス以北の貧民家族像とは異なり、この貧民一家は「古典主義化」された身体を与えられている。ひととき存在感のある、膝を組んで体をねじる男性はラファエロの引用（ヴァチカン教皇宮殿署名の間壁画《聖体の論議》のアダム）であり、一五九四／九五年のローマ行き前後にアンニバレ・カラッチが古典主義化傾向を加速させていたことを窺わせる<sup>22</sup>。左腕に男児を抱きながら施しの硬貨を見せる子どもに笑みを向けるこの貧しい父親像には、怠惰な乞食への揶揄や浮浪者への蔑視は見られない。

ニコルズは、足奏えを台車で運ぶ半裸の男性に、貧しい者同士の互恵と隣人愛の理想像を読み取っている<sup>23</sup>。同じことは、



図7

聖人の元にも指摘できる【図6】。彼が左手に持ったヴィオラは、路上でギロンダを奏でて施しを促す盲人を想起させる。さらに、前方で振り返る老女の声を聴くように眼を閉じた顔をこちらに傾ける仕草から、この人物が盲人であると分かる。彼の前では、膝上までの短い衣しか着けていない少年が聖人のほうに駆け寄っている。少年の左肩には盲人の右手が置かれており、彼がただ施しを求めているのではなく、盲人の導き手を務めていることが読み取れる。この場面は、フエデリコ・パロッチの《民衆の聖母》（二五七六〜七九、ウツフイーツィ美術館）

【図7】の前景右側に描かれた、盲目のギロンダ弾きと彼から硬貨の施しを受ける足萎えを想起させよう<sup>24</sup>。

しかしながら、助け合う貧民たちの描写は単なる理想化の表現にとどまらない。というのも、十四世紀にはパドヴァやヴェネツィアで盲人と四肢障害者が相互扶助団体を結成しており、十五世紀にはドイツ語圏にも広がった<sup>25</sup>。一六一三年にローマでも同様の信徒会が結成され、公共空間で物乞いを行う認可を教皇から勝ち取った<sup>26</sup>。身障者同士が互いの目と足となって助け合う姿は、隣人愛の美德を表わすと同時に、怠惰な「偽の貧者」と自らを弁別し、施しに値する真の貧者として自活権を主張する身障者＝貧者の実際の活動を念頭に読み取る必要がある<sup>27</sup>。

貧者像の理想化は、一六〇九年に早世したアンニーバレ・カラッチの後を継ぎ、ローマに古典主義絵画の流れを作ったドメニキーノ（一五八一〜一六四一年）によって大々的に展開された<sup>27</sup>。ローマのフランス人共同体教会であるサン・ルイジ・デイ・フランチェージ聖堂のポレ礼拝堂に彼が描いたフレスコ壁画連作のうち、『聖女カエキリアの施し』（二六一一〜一四四年）【図8】には、互恵と自助に溢れたあるべき貧民像が明瞭に描かれている<sup>28</sup>。

ドメニキーノは、アンニーバレの構図に倣って、宮殿のテラスの上から衣類を貧者に分け与える聖女を画面右上景に後退させ、画面半分を施しを受ける貧民の描写に充てた。画面前景で



図 8

は、一枚の布を奪い合う子どもとこれを叱る母親、左端に立つ古着商に聖女から施された衣服や布地を見せて売ろうとする男女が描かれ、救うに値しない怠惰な貧民イメージが示されている。これに対して中景では【図9】、老人を抱きかかえて石段を上る男性を中心に、肩車をして助け合いながら施しに手を伸ばす子どもたち、幼子を抱いた女性や老人、裸の子に服を着せ

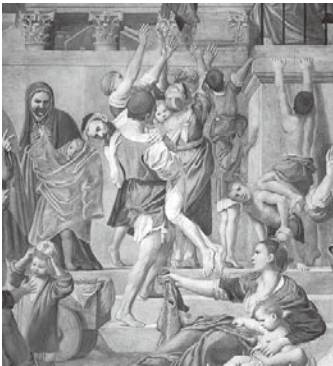


図 9

るべール姿の寡婦が配されている。前景と比較すると、段上に描かれているのは善意と相互扶助の精神に溢れた理想的貧者と解釈してよいだろう。前景と中景を分ける階段が、貧民の魂を怠惰の悪徳から慈愛の美德へと上昇させるメタファーとして使われている。この意匠は、ラファエロ以後の貧民像の理想化プロセスで幾度となく用いられたものだ<sup>29</sup>。

十六世紀後半に現れた相互扶助の精神をもつ理想的な「良き貧民」イメージは、貧困層に物乞いを禁じて労働を課す救貧政策と表裏一体であったと考えられる。実際、カラッチが活躍していたポロニヤは、真の困窮民を救貧院に強制的に収用する措置を他都市に先立つ一五六三年に始めた都市である<sup>30</sup>。十六世紀から十七世紀に、諸都市では老人、悔悛娼婦、そして身障

者ではない貧民に分けて救貧施設が設立され、それぞれ可能な労働を課していた<sup>31</sup>。近世の新たな貧民カテゴリーは、表象においても現実の政策においても階級性とジェンダーに強く規定されていた。

### (三) ローマの特異性——貧者像のスペクタクル化

聖都ローマでは、ヴェネツィアのような世俗行政による選択的救貧政策への移行は見られず、近世を通じて施し手の救済を説く善行論の観点から貧民救済を捉える傾向が強い。他都市で盛んになる貧民収容施設内部の閉鎖的な活動よりも、公的空間での儀礼化された慈善が重んじられ、救済対象の資質を問わない伝統的な救貧主義が主流だった。

ただし、十六世紀後半にトレント公会議（一五四五～一六四年）が閉会し対抗宗教改革運動が実践された一時期のみ、貧民・乞食の放浪者対策として分離主義的隔離政策が行われている。

一五六九年に教皇ピウス五世は貧民を市内四地区に集めて食物を配給した。ボローニャ出身のグレゴリウス十三世は、おそらく故郷の貧民隔離政策を念頭に、一五八一年にローマ市内の病気または障害をもつ全ての乞食をカラカラ浴場跡の旧ドメニコ会修道院サン・シストに強制収容する法令を出し、登録した老若男女の貧民に大行列を組ませてサン・シスト院に入所させるパフォーマンスを行なった（態勢不十分で頓挫）。ローマ大改造を遂行したシクストゥス五世は、グレゴリウス十三世の後を継いで旧市街のシスト橋近くに二千人収容可能なサン・シスト治療院を建設し、一五八七年に全貧民の収容と路上での物乞い行為の全面禁止を布告した。彼は、身体障害者には剃髪と灰色の服の着用を義務づけ、治療院に収容して食糧を供給する一方で、貧民女性には裁縫、男性には読み書き・職能教育を与え

て公共事業に活用する分離主義的政策を取った。しかし教皇の死後は集権力を失い、以後十七世紀末のインノケンティウス十二世によるサン・ミケレ総合救貧院設立まで組織的貧民政策はなされず、修道会、信徒会による個別慈善の域を出なかつた<sup>32</sup>。

聖年をはじめ膨大な数の巡礼者を受け入れた近世のローマでは、貧民人口率が他都市の二～三倍と高く<sup>33</sup>、集権的な貧民強制収容策は困難だった。十六世紀末の選択的救貧政策も教皇個人の意向に頼る面が大きく、サン・シスト救貧院の場合もシクストゥス五世の死後に収容人数が激減するなど一時的な試みに終わった。

サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂右袖廊のシステイーナ礼拝堂にある教皇シクストゥス五世の墓廟には、テヴェレ河岸のサン・シスト院に向かう行列を記念した興味深い浮彫りパネルが含まれている（ニコラ・ピッツィ、エジディオ・デツラ・リヴィエラ『シクストゥス五世によるサン・シスト救貧院設立』、一五八七年頃）【図10】。前景にエクレシアと慈愛の女性擬人像が坐し、中景から後景にかけて粗石のアーチ扉が特徴的な救貧院と宗教行列が表されている。右中景に描かれた一群を見ると、松葉杖で体を支えた半裸の男性身障者を先頭に、ベールをかぶって俯いた寡婦と思われる女性、上衣のみの壮年の貧民、老人が左側の救貧院のほうに進んでおり、彼らが入所する貧民を現すことが分かる。このパネルでは、伝統的な貧者像である男性



(一) 慈愛の美德擬人像  
 キリスト教的隣人愛や「七つの善行」の表現には、キリストや使徒による病人の治癒、聖人の貧者・病人への施しや看護といった物語主題のほか、対神徳のひとつ「慈愛(カリタス)」概念の擬人像がある。甲斐は、バロッチの《民衆の聖母》の前

#### 四 貧民母子像の系譜

身障者が最も目立つ位置に配されているが、寡婦、壮年男性、老いた男性という他の貧民カテゴリーも教皇の慈善事業を彩るスベクタクルとして可視化されている。



図 10



図 11

景左に大きく描かれた母子三人の群像を分析する過程で「慈愛」女性擬人像の系譜を辿り直している。慈愛には物質的な恵みを表す「隣人愛」の次元と、神への愛という霊的な次元の美德を表す「慈愛」がある。十三世紀半ばからイタリアの聖堂装飾の中に女性擬人像が現れた。前者は貧者や弱者への施しという具体的な行為によつて、後者は炎や心臓など愛を象徴するアトリビュートによつて表される例が一般的だが、十四世紀前半より、慈愛擬人像としての授乳の母子群像が登場した。甲斐によると最初期の例がティエーノ・デイ・カマイーノによるフィレンツェ洗礼堂のための母子群像(二三二一年、フィレンツェ、バルディーニ美術館)【図11】である<sup>34</sup>。

両の乳房を子どもに吸わせる女性座像は、古代においては豊饒を司る大地女神テルスやホルスに授乳するイシス女神のイ



メージ、古代ローマでは皇帝の美德（ピエタス）、キリスト教中世ではエクレシア（信徒を霊的な乳で育む教会）の女性擬人像に用いられた長い歴史を持つ<sup>35</sup>。子どもに授乳する女性像が慈愛擬人像となった十四世紀前半は、イタリア中部でイエスに授乳する聖母マリア図像が盛んに作られた時代でもある<sup>36</sup>。マイルズが指摘したように、その背景には深刻な食糧難と経済危機だけでなく、都市民の間に高まった乳母制度の需要や、これに反対する聖職者や男性知識人からの母乳育児の奨励など、授乳行為が社会的な争点だったことが挙げられよう<sup>37</sup>。授乳は乳児という最も弱き存在にとつて不可欠な物質的な恵みであり、同時にトマス・アクィナスらが神への愛に比した「見返りを求めない母性愛」の観念をも想起させることができる。幼児に授乳する女性像が一般に「母子」と呼ばれるのはそのためである。甲斐はイタリアにおける十四世紀から十六世紀までの母子像を用いた《慈愛》表現の展開を後づけ、一五〇〇年代には絵画・彫刻双方に子どもを伴う慈愛女性擬人像が一般化したと述べている<sup>38</sup>。

## （二）貧民母子像の象徴性

慈愛の美德と母子像の結合を念頭に、施し・看護・治癒などの隣人愛と物質的な慈善の場面を見直すと、幼児を伴う貧しい身なりの女性（貧民母子）がしばしば挿入されていることに気づく【図4】<sup>39</sup>。ヴェネツィアの救貧法では、救済すべき貧者

カテゴリーに「乳飲み子を抱えた貧しい女性」を加えている。伝統的な貧者像は足萎えや病人など伝統的に男性ばかりだったが、十六世紀以降は新たな救貧政策を反映してか、「恥じらう貧者（没落市民）」、老人、寡婦のほか、社会の最底辺にいた母親たちも正当な慈善対象として可視化された。母であることを明示するために、片方の乳房をはだけて授乳する姿も多い。

ルークマーカーは、十七世紀絵画において、物語主題に含まれる慈愛の象徴的意味を補足するために「慈愛」の擬人像として母子群像が挿入された、と非常に重要な指摘をしている<sup>40</sup>。上述した、慈善に関わる物語主題に副次的人物として描かれた授乳の母子像もまた、慈愛という概念の擬人像だった可能性がある。そこで想起されるのが、カラッチの《聖ロクスの施し》でひととき目を引く、画面のほぼ中央に佇む母子像である。

もう一度、カラッチの画面を見直してみよう【図5・6】。左前景の群像と右上景で台の上から金銭を施す聖人とをつなぐ重要な位置に、たつぷりと布を纏った裸足の女性が左胸に乳児を抱いて階段を降りている。他の貧者が施す聖人のもとに集まるか、すでに硬貨を手に行っているのに対して、この女性だけは硬貨や木の椀など施しの受け手としての印を持たない。古代ローマのマトロン像を思わせるモニュメンタルな身ぶりは、彼女に高貴な雰囲気を与えている。構図の要となる位置や、衣を押さえながら背後の貧者（少年に導かれる盲人）に観者の注意を促す身振りは、この女性像が画面全体の意味内容に深く関わる

ことを示している。筆者は、中央の母子像を慈愛の擬人像と見なし、周囲に風俗画のように展開する貧民群像を慈愛の物質的な表れ（隣人愛）と捉え、全体として慈愛のあるべき姿を表すと考ええる。十六世紀の善行としての救貧論では、施す相手を見誤らないこと（真／偽の区別）と、神への愛と隣人愛に裏打ちされた誠実な姿勢が求められた。カラッチは、施しの受け手である母子像を、神への愛と隣人愛からなる慈愛の擬人像に昇華させて、施し手、受け手双方の倫理的正しさを強調したのではないだろうか。堂々と階段を下りる母親像は、真の貧者にふさわしい美徳とは何か、また善行を救済の道たらしめるのは慈愛の美徳であることを観者に伝えていようと思われる。

### 五 十七世紀ローマのペスト凶像における貧民像のジェンダー

一六三〇年前後に大規模なペスト流行に襲われたイタリア諸都市では、ヴェネツィア共和国の公式ペスト祭壇画を契機に、ペスト凶像に疫病犠牲者の描写が挿入されるようになる。これまで検討してきた十六世紀から十七世紀の貧民イメージの変容をふまえて、ペスト患者・犠牲者の描写を確認すると、ペスト犠牲者の身体描写はラファエロ以後、一五四〇年代に形成された新たな貧者像を継承したと結論づけられる<sup>41</sup>。

#### （二）貧民としてのペスト犠牲者像

一六五六年のナポリの大ペスト流行終焉を記念して描かれたルカ・ジョルダノの祭壇画（ルカ・ジョルダノ『一六五六年ナポリのペスト情景とキリストにとりなす聖母、聖ヤヌアリウス』一六六〇～一六一年頃、ナポリ王宮）<sup>【図12】</sup>を例にペスト犠牲者の身体を観察すると、黒ずんだ皮膚やリンパ腺の腫瘍といったよく知られた腺ペストの症状が写実的に描写されているだけでなく、半裸、みすばらしい身なり、力なく横たわるポーズなど貧者の指標が使われている。しかし同時に、その身体



図 12



図13

は古典彫像のような比例と筋肉を備えた理想化された「美しい」貧者の承譜を受け継いでいる。まさに、救貧論で説かれたところの労働に適した体を持ちながら他者の慈善に頼る貧者、すなわち偽の貧者が想起されないだろうか。罪や悪のイメージと取り換え可能な、逆さまに横臥する身体描写は、否定的な印象をさらに強めていよう。

病と組み合わされた貧者イメージは貧民と病人を同一視する伝統的な貧者観念を継承したものが、十七世紀における貧者＝ペスト犠牲者の描写は中世末までの貧者像（身体障害を抱えた男性、老人、巡礼者）とは大きく異なっている。結論を先取りするなら、男性犠牲者の身体には「理想化」が施され、女性犠牲者の身体には慈愛の欠如とも呼ぶべき否定的な操作が加えられた。ジェンダーによって異なる描写が端的に現れるのが、ペスト図像における母子像である。

公式ペスト画像に犠牲者像が挿入され始めた一六三〇年に、ニコラ・プッサンはローマで旧約聖書に取材した歴史画《アシユドドのペスト》（一六三〇～三一頃、パリ、ルーヴル美術館）【図13】を制作した。その前景中央には、胸をはだけて横臥する母とその乳房にすぎる乳児、死臭に鼻をつまんで埋葬しようとする男性の群像が描かれた。この群像はラファエロの原画による銅版画《モルベット》（一五一四年頃）【図14】に由来する<sup>42</sup>。プッサンがラファエロを再解釈してペスト図像に導入した貧民母子像は多くの芸術家に影響を与え、ペストの情景を表



図 14

すライトモチーフとして一六三〇年代以降にローマ以外の都市でも広く引用・参照された【図12】。

貧民イメージにおける母子像の系譜と、「慈愛」の擬人像との連続性をふまえると、この犠牲者母子の群像は、総じて否定的なニュアンスを帯びたと考えられる。

まず、死んだ母親はもはや子どもに栄養と保護を与えられぬ。慈愛の擬人像として一般化した授乳の母子像と反対に、救済に値する貧民の必要条件——慈愛と互恵の美德——を欠いた存在となってしまう。次に、画面の下辺や隅など周縁的な位置に描かれることが多く、力なく仰向けに横たわる身体には神罰に打倒された悪のイメージと同じ造形言語が用いられている。特に祭壇画では上空で救済をとりにす聖母マリアと対置されることから、

罪と死をもたらしたエバを想起させる。この母親像の存在によって、観者は画面前景を埋める男性犠牲者の古典主義的な身体も否定的なイメージとして受け取るよう促されるのではないか。さらに、都市当局が発注した公的ベスト祭壇画の場合、より社会政策的な意味合いが強くなる。十七世紀のベスト祭壇画の特質のひとつは、母子像を含めベスト犠牲者の周囲に看護者や霊導師の姿が見られないことである。誰にも看取られず見捨てられた犠牲者の姿は、臨終の秘蹟を受けずに死ぬという恐ろしいイメージであった。というのも、カトリック教会はトレント公会議において、救済には聖職者が執行する七つの秘蹟が不可欠であることを教義として確認し、十六世紀末から宗教画を通してカトリック都市民の教化が行われたからだ。臨終の秘蹟（最終告解、最終聖体拝領、終油）を受けない者は、現世の罪の赦しを得ずに罪の中に死ぬことになる。それはすなわち、美德を欠いた（＝救済に値しない）犠牲者＝貧民に地獄墮ちの運命が待っていることを意味したのである。誰にも顧みられず積み重なる遺体が、最後の審判図における地獄の描写を連想させる、ひとつの理由である。

## （二）救われるべきベスト患者の表象

貧者と重ね合わされたベスト犠牲者の群像は、社会全体に慈愛の美德とそれに基づく善行の実践が足りないことを示唆した。この欠損を補うように、十六世紀末から十七世紀にベスト患者



に靈的な救いを与える聖人を栄光化した図像が量産された。その原型となった主題が「ミラノのペスト患者を見舞う聖カロ・ポッロメーオ」である。

一五七五年のペスト大流行で大きな犠牲を出したロンバルディア地方では、トレント公会議決議の起草者としてカトリック改革の先頭になったカロ・ポッロメーオ（一五三八〜八四年）が、ミラノ大司教として大司教区全体のペスト対策の陣頭指揮を執った。彼



図 15

は自らペスト患者を見舞い、秘蹟を授け、またミラノの人々をカトリック信仰に向かわせるため三日間にわたる悔悛と嘆願の行列を組織した。一五八四年のカロの死の直後から列聖運動が始まり、信仰拡大の一環として、ペスト流

行中のカロの行いを含むカロ伝連作が多く描かれた（チェーザレ・ネッピア《ペスト患者への最終聖体拝領と聖釘行列する聖カロ》一六〇四年、パヴィア、コレージョ・ポッロメーオ）【図15】。一六一〇年に列聖されてからは、彼の聖人伝に取材した宗教画が急増した。代表的な図像が、聖カロ・ポッロメーオが罹患の危険を顧みず掘立小屋の並ぶ隔離施設を見舞って、貧しい患者たちに臨終の秘蹟を授ける場面である。

十七世紀のイタリア絵画に聖職者が聖体拝領を施す祭壇画が増えたことに着目したベツクルは、その原型として「瀕死のペスト患者に最終聖体拝領を授ける聖カロ」図像を収集・検証した。そして、この画題が聖カロという一人の聖人を称揚するためだけではなく、トレント公会議でカトリック教会の正統教義として再確認された聖餐の秘蹟（ミサ典礼で聖職者によって聖別されたパンとワインをキリストの肉と血として信徒が与る）の教化・宣教に用いられたことを明らかにした<sup>43</sup>。

「聖カロのペスト」が生んだもうひとつの重要な主題が、ミラノ市全体の悔悛を示し神の慈悲を歎願するために聖カロが組織した「聖釘（Sacro Chiodo）の行列」である。ペスト流行の凄惨な光景の中を、キリストを十字架に打ちつけた釘のひとつと信じられた聖遺物を掲げた聖カロが進む様を描いた数多くの作例は、麻の綱を首に巻いて罪の悔い改めを呼びかける大司教の篤い信仰心を表現している。

十六世紀末に誕生した二つの聖カロ主題が登場するローマ





図 16

六七年、ローマ、サン・カルロ・アイ・カティナリー聖堂）【図16】。画面右奥から左に向かつて、天蓋の下で聖釘を掲げて深い悔悛の表情を浮かべた聖カルロが歩いている。重要なことに、画面前景には二種類の貧者が登場する。右側には、背後から別の貧者に介添えされた半裸の男性が、聖遺物と聖人を崇めている。肩と脚をむき出しにした格好から彼が物乞いで生きる貧者であり、その青白い皮膚からペストに罹患した病人であることが見て取れる。左側では、両手を合わせて聖遺物に祈る赤衣の女性の手前で、青紫の衣を付けた若い女性が聖人の前に跪き、祝福を請うように乳児を差し出している。前者は瀕死のペスト患者としての貧民男性、後者は貧民母子であり、近世に現

の祭壇画の事例を通して、貧民母子像の新たな意味づけを考えたい。  
ローマのサンティ・カルロ・エ・ビাজิโอ・アイ・カティナリー聖堂は、聖カルロとつながりの深いバーナビット会聖堂で

ある。ミラノ人共同体の資金によって聖カルロに献げられた聖堂が完成すると、内陣に掲げる祭壇画コンベが行われた。ローマの盛期バロック画壇を代表するピエトロ・ダ・コルトーナは、《ミラノのペストにおける聖カルロの聖釘行列》を提出し、祭壇画の委嘱を勝ち取った（一六五〇）

れた信仰心に溢れた「理想的」貧民像をジェンダーの異なる一組の人物で表している。

同じ祭壇画コンペにピエール・ミニヤールが提出した図像は、十七世紀のペスト図像に挿入された貧民母子の意味を考える上で非常に重要と思われる。ミニヤールが選んだ主題は、『ミラノのペスト患者に聖体拝領を授ける聖カルロ』（一六四七年頃、カーン美術館）【図17・18】である。聖堂の内部に設定された画面には、ベッドやマットレス、床に半裸の病人たちが横たわ



図 17



図 18

っており、これがペスト患者の隔離施設（ラザレット）であることを窺わせる。大きな開口部の向こうにサンタンジェロ城とヴァチカンの城壁が見え、この空間が十六世紀末のミラノではなくローマ郊外に設定されていることが分かる。

画面の中央には、長い蠟燭を灯し聖具をもった助祭と、ラザレットを運営する修道士と思われる黒衣の人物に付き添われて、赤い枢機卿服を着た聖カルロが聖杯から聖体のパンを差し出している。彼が聖餐の秘蹟を授けるのは若い女性である。彼女は

裸足を投げ出すように座り、男性に抱きかかえられて上半身を起こして聖人を仰いでいる。床に敷いたむしろと前景右隅に置かれた小鉢、投げ出した裸足から、彼女が施して生きる極貧の女性であることが示される。この貧民女性の膝には幼児が力尽きたようにうつぶせになっている。女性は青ざめた顔色をし、左腕は子どもの上のだらりと落ちていることから、死が近づいたベスト患者であろう。したがって、聖カルロが授ける聖体拝領は、最終告解と赦し、終油からなる臨終の秘蹟の一部であり、魂の救済を得るための最終聖体拝領を意味する。

この作品では、ベッドに横たわる男性患者ではなく、疫病の犠牲になった貧民女性が、死を前にして魂の救済の糧となる聖体を授かる情景に焦点が当てられている。彼女が救済に値する貧者＝ベスト犠牲者となるのは、その右手に架けられたロザリオの数珠に象徴される篤い信仰の美德を備えているからである。本論で検討してきた近世の貧民像への多様なまなざしを鑑みるなら、ミニヤールが描いた貧困と病によって死ぬ運命にある母子は、胸をはだけて地面に横臥する母子像と反対に、男性聖人の手から救済の糧を与えられた理想的な貧困母子像として表象されている。この作品において、貧民母子像は慈愛の美德を表すことを止め、男性聖職者の慈愛に溢れた最後の施しを一身に受ける従順な受益者として意味づけられたのである。

### 終わりに

近世イタリヤ絵画では貧者の描き方が大きく変化した。新たな貧者の表象は「救済に値する貧者は誰か？」という問いを觀者に投げかけた。その答えとして提示されたのは、病人、寡婦、悔悛娼婦のほか、名譽のため困窮を訴えにくい、本来可視化されにくい「恥じ入る」貧者である。一方、助け合う物乞いの姿を借りて、慈愛と信仰心といった美德を持つ者のみが受益者となること、ベストのように死が目前に迫る時にはそのような美德ある貧者の魂が救済に値することが説かれた。近世に慈愛の美德が母子像で表されたことをふまえると、幼い子供を置き去りにして疫病に倒れる女性像は、慈愛の美德を反転させたイメージとも読める。特に子に乳房を分け与えない、あるいは分け与えることのできない貧しい女性は、きわめてジェンダー特性の強い貧者像である。こうした階級性を付されジェンダー化された貧民像にまなざしを向ける鑑賞者は、施しの担い手と受け手の双方から構成されていた。彼らは自らの階級とジェンダーに重ね合わせて、貧者へのまなざしと社会的振る舞いを変えるよう促されたのではないか。

「附記」本研究は、平成二十二年度文部科学省科学研究費「若手研究B」（課題番号22720040）の助成による研究成果の一部である。

註

- 1 Nichols, Tom, *The art of poverty: Irony and ideal in sixteenth-century beggar imagery*, Manchester-New York, Manchester University Press, 2007.
- 2 *Others and outcasts in Early Modern Europe. Picturing the social margins*, ed. by Tom Nichols, Ashgate-Burlington, Ashgate, 2007.
- 3 七つの善行はマタイ伝の「わたしが飢えていた時に食べさせ、喉が渴いていた時に飲ませ、旅をしていた時に宿を貸し、裸の時に着せ、病気の時に見舞い、牢にいた時に訪ねてくれた」に死者の埋葬を加えた物質的慈善を指す。
- 4 ヘンダーソンによると、「キリストの貧者」が清貧の誓いを立てた托鉢修道士よりも貧民を指すようになったのは、一三三〇年のヴィッラーニによる再解釈以降である。Henderson, John, *Piety and charity in Late Medieval Florence*, Chicago, University of Chicago Press, 1994, p.258.
- 5 物乞いを風刺したサモサタのルキアヌス（一二五頃）一八〇年以後）の『寄生虫：物乞いは職業である』の論証（人文主義者クアリーノ・ダ・ヴェローナによって一四一八年にラテン語訳）を念頭に、アルベルティは物乞いで生きる
- 6 *Ibid.*, pp.131-2. Cf. Pestilli, Livio, "Blindness, lameness and mendicancy in Italy (from the 14th to the 18th centuries)", *Others and outcasts in Early Modern Europe*, pp.107-129, p.109.; Nichols, *op.cit.*, pp.57-58.
- 7 イタリア半島ではフランス軍の侵攻とともに梅毒が蔓延したため「mal francese（フランス病）」と呼ばれた。発疹や潰瘍など外面的な身体症状を伴う梅毒は、「同じく身体疾患を伴うらい病、ペストなど古くから知られた感染症と混同され「不治の病」として恐れられた。十六世紀前半には梅毒専門治療院がイタリア諸都市につくられた。
- 8 Pullan, Brian, *Rich and poor in Renaissance Venice*, Oxford, Brackwell, 1971, p.221.; Cottrell, Philip, "Poor substitutes: Imaging disease and vagrancy in Renaissance Venice", *Others and outcasts in Early Modern Europe*, pp.63-85, pp.63-64.この法令は一五二九年に厳格化された。
- 9 Chambers, D.S., Brian Pullan eds., *Venicea documentary history 1450-1630*, Oxford, 1993, pp.304, 308-9. ヴェネツィアの救貧法は、一五七四、七八、九三年に改定更新された。
- 10 Vives, Juan Luis, *De subventione pauperum sive De humanis necessitatibus, libri II, Selected works of J.L.Vives*, vol.IV, trans. notes edited by C.Matheusson, C.Fantazzi, assistance of J.De Landisheer, Leiden-Boston, Brill, 2002. ラテン語版は一五二六年ブルージュで二版、一五三〇年パリ、一五三二年リヨン、一五五五年バーゼルで



- 出版された。
- 11 *Ibid.*, lib. I, capp. 5-6.
- 12 *Ibid.*, lib. II, capp. 1-8. こうした世俗行政による新たな貧民政策は、キリスト教会が担ってきた伝統的な貧者観と相容れない点が多く「残酷」との批判も予想されるため、ピニスとは段階的な施策導入を助言している。
- 13 ブロニスワフ・ゲレメク『憐れみと縛り首：ヨーロッパ史のなかの貧民』早坂真理訳、平凡社、一九九三年（1986）。
- 14 Alkema, Bernard, "Lorenzo Lotto: la Pala di Sant'Antonio e l'Osservanza domenicana a Venezia", *Mitteilungen des Kunsthistorischen Institutes in Florenz*, 33, 1989, n.1, pp.127-140, pp.132ff. 本作に言及したリースの論稿は、下層民が登場する絵画主題と作例の提示に留まっている。Riis, Thomas, "I poveri nell'arte italiana (secoli XV-XVIII)", *Timore e carità. I poveri nell'Italia moderna*, Atti del convegno, a cura di Giorgio Politi, Mario Rosa, Franco della Peruta, Cremona, Libreria del Convegno editrice, 1982, pp.45-58.
- 15 Alkema, *art.cit.*, p.132.
- 16 Cesare Ripa, *Iconologia*, Roma, Gigliotti, 1593; Roma, Faci, 1603; Padova, Tozzi, 1611.
- 17 十六世紀前半から、フランドルとドイツのプロテスタント地域を中心に、身体をデフォルメされた「怠惰な乞食」イメージが作り出された。ルカス・ファン・レイデンの連作版画（一五〇九頃〜一〇〇年、アムステルダム、国立版画室）では、物乞いは男女とも身体の障害や疾病を示す義手義足を付けず、衣服に両手を隠し労働を嫌う「怠惰」の身ぶりをしている。これが、労働できる身体をもちながら他者の施しに依存する「怠惰な乞食」としての偽貧者イメージである。Nichols, *op.cit.*, p.194.
- 18 *Ibid.*, pp.152-158.
- 19 *Ibid.*, pp.158-161.
- 20 *Ibid.*, pp.162-165.
- 21 拙稿、「近世イタリア諸都市におけるベスト祈願行列の聖母マリア画像——疫病平定と癒しの宗教政治学」博士学位論文、千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇一年三月、七六〜一二八頁。
- 22 Nichols, *op.cit.*, pp.170-173.
- 23 *Ibid.*
- 24 《民衆の聖母》の画像解釈については、甲斐教行「フェデリコ・パロッチとカププチーノ会——慈愛の薔薇と祈りのヴェジョン」ありな書房、二〇〇六年を参照。
- 25 Pestilli, *art.cit.*, note 63.
- 26 Cajani, Luigi, "Gli Statuti della Compagnia dei ciechi, zoppi e stroppiati della Visitazione (1698)", *Ricerche per la Storia Religiosa di Roma*, III, Roma, 1979, pp.281-313.
- 27 浦上雅司「カルロ・チェーザレ・マルヴァジーア著「ドメニキノ伝」翻訳」『福岡大学人文論叢』四一卷二号、二〇〇九年九月、七五七〜八〇九頁、七六三頁。
- 28 ポレ礼拝堂壁画について、マルヴァジーアは靈感源となったアンニーバレの《聖ロクス》と比して「下町風俗画」と厳しく批判している。前掲論文、七七〇〜七七二頁。「アンニーバレが描いた情景は抑制が効いて堂々としているが、それに比べると、ドメニコの絵は幼稚で卑俗である。アンニーバレ



の絵には多様な行為が描き込まれている。(略)これらの一切が富を配分し貧困を癒すという絵画の内容に適っている。だが、ドメニコの絵では主要な画題から全くかけ離れた逸話的情景、無関係でおどけた幼稚な情景が描き込まれている。子供たちは誰も素直で楽しそうであり、敬虔で重々しく真剣な施しの雰囲気を目無しにしている」。

29 Nichols, *op.cit.*, pp.141-44.

30 Pestilli, *art.crit.*, p.118.

31 こうした救貧施設はトレント公会議決議を受けて司教権や教区司祭あるいは男性修道会の監督下に置かれたが、運営主体や規約などは既存の修道会系／在俗信徒会系扶助組織を雛型にしている場合が多い。例えば、フィレンツェでは十六世紀半ばから貧困少女や孤児少女を收容し読み書きと裁縫を教え未熟練労働で自活を図る慈善更生施設(Conservatorio, Ospedale delle Povere Abbandonate)が現れた。公式年代記では行政や男性修道会の主導が語られるが実質的な運営主体は修道女や寡婦であり、十五世紀以来の「Sechianza」のような修道女が運営する少女寄宿制をモデルにしたと思われる。Cfr. Strocchia, Sharon T., "Taken into custody: girls and convent guardianship in Renaissance Florence", *Renaissance Studies* vol. 17, no. 2, 2003, pp. 177-200.; Terpstra, Nicholas, "Mothers, sisters, and daughters: girls and conservatory guardianship in the Renaissance Florence", *ibid.*, pp.211-229.

32 ローマでは総合的貧民收容・更生施設としてテヴェレ河リーパ港にサン・ミケレ院ができるまで集権的な貧民收容・更生施設は組織されなかったが、十六世紀後半から教

区、修道会、信徒会レベルの救貧組織は増加している。例えば一五八九年にサン・ロレンツォ・イン・ルチーナ教区では教区聖堂後見枢機卿(設立時はポローニャ司教として聖画像改革やトレント決議を実践したガブリエレ・パレオツティ)の保護のもと教区の貧しい病人を助ける信徒会が結成された(規約: *Ordini della congregazione di S.Lorenzo in Lucina, per i Poveri infermi della Parrocchia*, Roma, Paolo Blado stampatore camerale, 1589)。ローマ市内で最も貧民人口が高かったサン・ロレンツォ・イン・タマン教区でも一六〇三年に同様の教区民団体が組織された(規約: *Statuti della congregazione del soccorso de' poveri della Parrocchia di S.Lorenzo in Damaso*, Roma, Stampatori camerati, 1603, nuova edizione, Reverenda Camera Apostolica, 1658)。

ローマ市内の慈善施設については一六〇一年のファムツチ、一六七九年のピアッツァによる総論を参照: Fannucci, Camillo, *Trattato di tutte l'opere pie dell'Alma città di Roma. Composto dal sig. Camillo Fannucci senese*. Nel quale si descrivono tutti gli spedali, confraternite, & altri luoghi pii, de quali tutti, o la maggior parte hanno facultà di comunicare i loro Privilegi, & Indulgenze, & si dichiara da chi steno state institute dette Opere, di che tempo, di quello che fanno, & molte altre cose curiose da intendersi. In Roma, con licenza de' superiori, Per Lepido Facij, & Stefano Paolini, 1601.; Piazza, Abbate Carlo Bartolomeo, *Opere Pie di Roma, descritte secondo lo stato presente, e dedicate alla Santità di Nostro Signore*

- Innocenzo XI dall'Abbate Carlo Bartolomeo Piazza degli Oblati di Milano, e Console della Sacra Congregazione dell'Indie. In Roma, Per Gio. Battista Bussotti, 1679.
- 33 Cerasoli, Francesco, "Censimenti della popolazione di Roma dall'anno 1600 al 1739", *Studi e documenti di storia di diritto*, vol.12, Roma, 1891, p. 14.
- 34 慈愛表現の変遷については、甲斐・前掲書、三三二頁以下を参照。
- 35 Rebaudo, Lodovico, "Fausta, Pietas e la Virgo lactans. Migrazione di un motivo", *Società e cultura in età tardoaonica*, a cura di Arnaldo Marcone, Grassano, 2004, pp. 181-209.
- 36 Williamson, Beth, *The Madonna of Humility: Development, dissemination & reception, c.1340-1400*, Woodbridge, The Boydell Press, 2009.
- 37 Miles, Margaret, "The Virgin's one bare breast: female nudity and religious meaning in Toscan early Renaissance culture", *The Female Body in Western Culture*, ed. by Susan R. Suleiman, Cambridge, Harvard University Press, 1986, pp. 193-208.
- 38 甲斐・前掲書「三二九〜三八頁。リーバ『イコノロジア』(ローマ、一六〇三年版)で、「カリタス」の擬人像は、神と被造物双方に向かう燃えるような愛を示すため「赤い服の、右手に燃える心臓、左腕に一人の子供を抱く女性」と定義されるに至った。
- 39 ラファエロ《足萎えを癒す》カルトーネ、ティントレット《キリストと姦淫の女》(一五四六頃〜四七)右端、プロスペロ・フォンターナ《聖アレクシウスの施し》(一五七三頃、ボローニャ)、サン・ジャコモ・マッジョーレ聖堂)左前景他。
- 40 Rookmaker, H.R., "Charity in Seventeenth Century Art", *Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek*, 1972, pp. 61-66.
- 41 筆者はすでにベスト図像における貧民＝ベスト犠牲者表象についてジェンダー論的考察を行っている。本論では近世における貧者像の変容の延長線上に捉え返すことを試みた。拙稿「ベスト危機における女性身体と乳房表象」「イメージ&ジェンダー」十号、二〇一〇年三月、八〜一七頁。「ベスト危機とジェンダー表象」：近世イタリア諸都市におけるベスト犠牲者イメージの創出」『ジェンダー史学』六号、二〇一〇年十月、二九〜四二頁。
- 42 ラファエロの群像は、プリニウスの『博物誌』35巻98節に登場する、テーベのアリステイデスが描く「占領された町」の記述に依拠している。そこには「死にかけた母親とその乳房にすがる嬰兒」が描かれたとプリニウスは書いている。ラファエロは「占領された町」をベストに襲われた都市に読み替え、瀕死の母と幼児に、死臭に鼻をつまむ男性を組み合わせた。
- 43 Boeckl, Christine Maria, *Baroque plague imagery and Tridentine Church Reforms*, Ph. Diss., University of Maryland, 1990.
- 44 二〇一一年十二月のシンポジウムにおいて、隠岐由紀子氏から横臥する母と子の描写が戦争の図像に用いられた可能性について質問を頂いた。示唆に富むご意見に感謝申し上げます。今後、戦乱の危機と貧民表象の関わりにも視野を広げたいと考える。

図版リスト

- 図1 マザッチョ《足奏えを癒すペテロ》一四二六―二七年  
 フレスコ壁画 ファイレンツェ、サンタ・マリア・デル・カ  
 ルミネ聖堂ブランチカッチ礼拝堂
- 図2 ロレンツォ・ロット《聖アントニーノの施し》一五四〇  
 ―四二年 ヴェネツィア、サンティ・ジョヴァンニ・エ・  
 パオロ聖堂
- 図3 図2前景部分
- 図4 ラファエロ《足奏えの治癒》カルトーネ 一一五一―一六  
 年 ロンドン、ヴィクトリア&アルバート美術館
- 図5 アンニーバレ・カラッチ《聖ロクスの施し》一五八八―  
 九五年 ドレスデン絵画館
- 図6 図5前景部分
- 図7 フェデリコ・パロッチ《民衆の聖母》一五七六―七九年  
 ファイレンツェ、ウツフイーツィ美術館
- 図8 ドメニキョーノ《聖女カエキリアの施し》一六一―一四  
 年 フレスコ壁画 ローマ、サン・ルイジ・デイ・フラン  
 チエーリ聖堂ボレ礼拝堂
- 図9 図8中景部分
- 図10 ニコラ・ピッピ、エジディオ・デッラ・リヴィエラ《シ  
 クストゥス五世によるサン・シスト救貧院設立》c.1587 大  
 理石浮彫 ローマ、サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂  
 システイーナ礼拝堂、シクストゥス5世墓碑
- 図11 テイーノ・デイ・カマイーノ《慈愛》一三二一年 大理  
 石 ファイレンツェ、バルデイーニ美術館
- 図12 ルカ・ジオルダーノ《一六五六年ナポリのベスト情景と  
 キリストにとりなす聖母、聖ヤヌアリウス》一六六〇―

六一一年頃 ナポリ王宮

- 図13 ニコラ・プッサン《アシュドドのベスト》一六三〇―  
 三一年頃 パリ、ルーヴル美術館
- 図14 ラファエロ原画、マルカントニオ・ライモンディ翻刻《モ  
 ルベット》一五一四年頃 銅版画
- 図15 チェーザレ・ネッピア《ベスト患者への最終聖体拝領と  
 聖釘行列する聖カルロ》一六〇四年 フレスコ壁画 パ  
 ヴィア、コレージョ・ボッロメーオ
- 図16 ピエトロ・ダ・コルトーナ《ミラノのベストにおける聖  
 カルロの聖釘行列》一六五〇―一六七年 ローマ、サン・カ  
 ルロ・アイ・カテイナリー聖堂主祭壇裏
- 図17 ピエール・ミニヤール《ミラノのベスト患者に聖体拝領  
 を授ける聖カルロ》一六四七年頃 カーン美術館
- 図18 図17部分

図版出典

- Tom Nichols, *The Art of Poverty: Irony and Ideal in  
 Sixteenth-Century Beggar Imagery*, Manchester-New York,  
 Manchester University Press, 2007. 図1, 4, 5, 6,  
 8, 9
- Lorenzo Lotto, *catalogo della mostra*, a cura di Giovanni  
 C.F. Villa, Milano, Silvana Editoriale, 2011. 図2, 3
- 甲斐教行『フェデリコ・パロッチとカッブチーノ会―慈  
 愛の薔薇と祈りのヴィジョン』ありな書房、二〇〇六  
 年―図7, 11

- Others and Outcasts in Early Modern Europe. Picturing the Social Margins*, ed. by Tom Nichols, Adelshot-Burlington, Ashgate, 2007. — [㊦](#) [㊧](#)
- Oreste Ferrari e Giuseppe Scavizzi, *Luca Giordano*, 3 vols., Edizioni Scientifiche Italiane, 1966. — [㊦](#) [㊧](#)
- Konrad Oberhuber, *Poussin, the Early Years in Rome: The Origins of French Classicism*, New York, Hudson Hills Press, 1988. — [㊦](#) [㊧](#)
- Hope and Healing. Painting in Italy in a Time of Plague, 1500-1800*, exhibition catalogue, Gauvin Alexander Bailey, Pamela M. Jones, Franco Mormando, Thomas W. Worcester eds., Clark University, College for the Holy Cross, Worcester Art Museum, University of Chicago Press, 2005. — [㊦](#) [㊧](#) 19' 17' 28
- Carlo Borromeo e l'Opera della <Grande Riforma>, Cultura, Religione e Arti del Governo nella Milano del pieno Cinquecento*, a cura di Franco Buzi e Danilo Zardin, Milano, Silvana Editoreale, 1997. — [㊦](#) [㊧](#)

# *Gender e la Povertà: la Trasformazione del Pauperismo e delle Immagini dei Poveri in Italia della Prima Età Moderna*

**SHIMBO, Kiyono**

La povertà è sempre stata, e ancora oggi è uno dei problemi sociali. Nella Storia dell'arte italiana abbiamo le numerose immagini della povertà da cui si può trarre gli sguardi svariati, non privi delle contraddizioni, verso i poveri. Vengono definiti, innanzitutto, come oggetti della carità cristiana, ma la povertà stessa può significare anche una scelta positiva, una forma ideale di *Imitatio Christi*, per gli ordini mendicanti. Dalla seconda metà del Quattrocento, però, emerge un'atteggiamento nuovo che vide in poveri il male da eliminare dalla società urbana. In questo saggio, si cerca di chiarire le trasformazioni degli sguardi verso i poveri nei Cinque-Seicento in Italia mettendo l'occhio sulle rappresentazioni del *Gender*.

Tradizionalmente *Poveri di Cristo* furono rappresentati dalle figure maschili, disabili o vecchi, oppure dai pellegrini, da cui particolarità fisiche è facile comprendere che loro furono beneficiari legittimi delle opere misericordiose. Verso la metà del Quattrocento, invece, da parte degli intellettuali, ad esempio gli umanisti Leon Battista Alberti o Juan Luis Vives, si manifestavano le accuse ai poveri mendicanti d'essere peccatore della pigrizia quindi il male da cacciare via dagli spazi pubblici urbani. Con questa trasformazione del pauperismo, le città, Venezia prima fra tutte, presero atto la politica secolare del pauperismo selettivo, anziché quello indiscriminato e religioso che tradizionalmente viene legittimato dalla Chiesa cattolica.

Dall'analisi intorno alla pala d'altare veneziana del Lorenzo Lotto (*Lelemosina di Sant'Antonino*, 1540-42), quella bolognese del Annibale Carracci (*Lelemosina di San Rocco*, 1588-95), e l'affresco romano del Domenichino (*Santa Cecilia distribuisce i beni ai poveri*, 1611-14), si è verificato che nella pittura italiana dei Cinque-Seicento la rappresentazione della povertà si trasformava a produrre le nuove categorie visive dei poveri attraverso le figure femminili: poveri vergognosi, vedove,



e madri con bambini. Facendo delle ulteriori considerazioni sopra l'immagine della povera madre con bambino, abbiamo scoperto che questa sarebbe stata una variante dell'allegoria della Carità, ma in contesti diversi, come la pala commemorativa della pestilenza di Napoli avrebbe potuto significare la peccatrice che venga distrutta dalla punizione divina, o al contrario, il simbolo delle vittime ideali che dopo pentimento dei propri peccati, riabbracciando la fede cattolica e prendendo i sacramenti dai santi sacerdoti vengono promesse la salvezza, non del corpo ma dell'anima. Così, nelle città italiane della Prima Età Moderna il problema sempre aumentato della povertà e le trasformazioni del pauperismo producevano le nuove rappresentazioni "genderizzati" dei poveri, dalle quali potevano essere influenzati pure gli sguardi e gli atteggiamenti dei loro osservatori contemporanei.